今月の一品 令和 6(2024)年 8 月

飯能市立博物館
きっとす
今月の一品

飯能市立博物館
Hanno Municipal Museum

武蔵野を探る会会報『むさしあぶみ』

飯能市立博物館 学芸職員 波田 尚大

飯能池袋間を結ぶ現在の西武池袋線は、武蔵野鉄道株式会社によって大正 4(1915)年に営業運転が開始されました。その武蔵野鉄道株式会社の旅客課(のちに営業部)内に「武蔵野を中心とする史蹟伝説の研究および低山趣味を普及し、いわゆる自然を介して会員相互の親睦を計る」ことを目的として、武蔵野を探る会が設立されました。その会報として毎月発行されたのが、『むさしあぶみ』です。『むさしあぶみ』の第一号はその当時発行していた雑誌『山』の新著紹介欄を確認すると、昭和 9(1934)年 10 月と記されています。よって、会自体の発足も同年頃だと考えられます。

画像 1 武蔵野を探る会会報
『むさしあぶみ』第 68 号

この『むさしあぶみ』は国立国会図書館及び埼玉県内の図書館などにも所蔵がなく、詳細については明らかになっていませんが、飯能市立博物館では第 8 号のコピーと第 16 号、第 20 号、第 63 号、第 67 号、第 68 号を所蔵しています。また、文化新聞紙上で「まちの記憶」を連載している加藤 寛之氏は第 27 号を所有しています。

現在把握している中で、最も新しい第 68 号(画像 1 参照)は、昭和 15(1940)年 6 月 1 日に発行されています。日中戦争の最中であり、およそ 1 年半後には太平洋戦争がはじまる時期でした。掲載の記事は「奥武蔵の寵児『白谷沢』」、「海沢を語る」、「姥小屋入」、「沢の旅 広河原谷」、「橋立川補遺 主としてすげの沢の記録など」、という現在の飯能市内をテーマとした紀行文のほかに、考古学者の柴田常恵の記した「武蔵野三十三所観音(その二)」や、武蔵野鉄道の路線図、「市民健康路」というコースの紹介、「奥武蔵だより」というイベントや観光案内、旅館などの広告です。同年の 1 月 1 日に発行された第 63 号では、作家の平山蘆江が天覧山のふもとの東雲亭で過ごした日々のことを記した「山小屋日記」が掲載されており、飯能およびその周辺地域における歴史・文化を紐解くのにも重要な資料と言えます。

『むさしあぶみ』を発行していた武蔵野を探る会がどのようにして解散に至ったのかは、明らかではありません。「奥武蔵研究会」の WEB サイトによると、昭和 24(1949)年、戦後の混乱の後に『むさしあぶみ』へ寄稿していた方々の中から、新しい奥武蔵を対象とした山の会を作る動きが生まれ、奥武蔵研究会の発足に繋がったことが記述されています。つまり、同会は少なくとも戦後には活動が下火になっていたか、あるいはなくなっていたことがうかがえます。

【参考文献】『山』梓書房 第 1 巻 11 号 昭和 9(1934)年 11 月 1 日/西武鉄道飯能池袋間開通 100 周年記念特別展図録『武蔵野鉄道開通』飯能市郷土館 平成 27(2015)年 10 月 11 日/加藤 寛之『飯能現代ご当地資料集』第 4 版 私家版 令和 6(2024)年 4 月 1 日/「奥武蔵研究会の沿革」[奥武蔵研究会 WEB サイト]/